【資料紹介】

翻刻　渡部寛一郎日記2（明治三十二年部分他）注釈・人名索引

大國　由美子
（渡部寛一郎文書研究会）

摘　要

『山陰研究』で翻刻を連載している、『渡部寛一郎日記』は、当時の山陰における教育の実態、地域政治と中央政治との関係を知るのに、貴重な史料である。ただ、記載されている人名や事項については、不明な点が多く、注釈なしでは、理解しにくい。本稿では、諸史料にあたって、できうる限り、事績や背景を明らかにしようと試みた。博雅の示教を請う。今回は、『渡部寛一郎日記』第二冊（明治三十一年・三十二年）の手帳の明治三十二年部分について注釈を行った（紙数の関係で、本号掲載の翻刻と範囲が少しく異なることに注意）。この注釈が、渡部寛一郎が、彼が校長を務めた修道館中学の経営のために、中央政官界、全国の教育者、旧藩関係者と交流する様子やその背景を理解するための一助となれば、幸いである。なお、文末に前回明治三十一年部分と合わせて、渡部寛一郎日記2全体の用語や人名の索引を付したので、参考にして頂きたい。

キーワード：渡部寛一郎　近代　政治　教育　漢詩

一、「渡部寛一郎関係文書」渡部寛一郎日記第二冊のうち、「卅二年六月学館用ニテ出京記」以降の人名・用語について、辞典等で調査したものである。スペースの都合上、特に著名人については、明治三二年前後の経歴を主にして記述した。詳細については出典等を参照されたい。また、できるだけ文献で裏付けをとるようにしたが、インターネットのみでしか確認できていないものもあり、その場合はアドレスを記載した。アドレスは二〇一九年九月末現在のものである。

一、日付順、登場順に全ての人名・事項について記載した。ただし、渡部の親戚（矢田千代子、渡部謙一郎）と、松平直亮（松平邸）、その家扶である安井泉、山口亮は頻出するため、初出にまとめた。また、同一日に何度か登場する人物についても一日に一度だけあ

げた。

一、日記中、日付がないメモ等の部分については、便宜的に以下のタイトルをつけ、掲載順に記載した。記載は初出のみ。

「翻刻　渡部寛一郎日記2（明治三十一年・三十二年）」『山陰研究11』195ページ上段3行目～11行目→【明治32年日記末尾】

「翻刻　渡部寛一郎日記2（続）（明治三十一年・三十二年）」（本号）→【明治31・32年日記覚え書○（ページ番号）・○（段）】

一、人名（事項）、【日記掲載年月日】、生年―没年、出身地、経歴（内容）の順に記載した。

一、以下の辞典等については、略して記載した。

島洋之助編『人材・島根』島根文化社、一九三八年→『人材』

伊藤菊之輔編『島根県人名事典』報光社、一九七〇年→『伊藤島根』

山陰中央新報社島根県歴史人物事典刊行委員会編『島根県歴史人物事典』山陰中央新報社、一九九七年→『島根歴史』

下中邦彦編集兼発行『日本人名大事典』一九三七年～一九三八年初版、一九八三年　復刻版第二刷、平凡社→『平』

国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』吉川弘文館→『国史』

臼井勝美、高村直助、鳥海靖、由井正臣編『日本近現代人名辞典』吉川弘文館、二〇〇一年→『近現代』

槌田満文編『新装普及版東京文学地名辞典』東京堂出版、一九九七年→『東京文学』

松江北高等学校百年史編集委員会『松江北高等学校百年史』島根県立松江北高等学校、一九七六年→『北高』

少年園編『東京遊学案内』一八九七年、ＴＯＫＹＯアーカイブ（東京都立図書館デジタルアーカイブ http://archive.library.metro.tokyo.jp/da/top）→『東京遊学』

以下、国立国会図書館デジタルコレクション（http://dl.ndl.go.jp/）

「官報」

『島根県職員録』

『職員録（甲）』→『職甲』、印刷局

『職員録（乙）』→『職乙』、印刷局

『職員録』（甲）（乙）ともに明治三一年度は欠号。

永井良知編輯『東京百事便』三三文房、一八九〇年→『百事便』

土岐秀苗、東都沿革調査会編纂『最新東京案内記 春の巻』教育舎、一八九八年六月→『案内記春』

土岐秀苗、東都沿革調査会編纂『最新東京案内記 夏の巻』教育舎、一八九八年六月→『案内記夏』

大國由美子「渡部寛一郎日記2（明治三十一年部分）注釈」『山陰研究11』、二〇一八年→『注釈1』

一、前号『山陰研究11』「渡部寛一郎日記2（明治三十一年部分）注釈」正誤表

184ページ下段　常磐亭→常盤亭

181ページ下段　枚原【卅三年頃県外礼状】→枚原【卅二年頃県外礼状】

179ページ上段　和田豊の項　後ろから7行目　『東京高等師範学校一覧』→『高等師範学校一覧』

〔注釈〕

熊本丸【明治32・6・15】前出（『注釈1』【明治31・9・9】）。三菱会社は、明治九年（一八七六）江華島事件、明治一〇年（一八七七）萩の乱、西南戦争などで、所有船の大部分を徴用され、一般貨客の輸送に不便をきたしたため、明治一〇年（一八七七）六隻の外国汽船を購入する。そのうちの一隻が熊本丸。明治八年（一八七五）イギリス・ニューカッスルで建造。旧名ガッヒール、一九一三トン、鉄船、二連成。その後日本郵船へ継承、明治二三年（一八九〇）香港航海。明治三五年（一九〇二）頃、横浜・神戸・小樽線（西回り。逓信省命令航路。横浜、神戸、尾道、門司、境、敦賀、伏木、直江津、新潟、酒田、土崎、函館、小樽間）就航。明治四〇年（一九〇七）日本郵船より売却される。（財団法人日本経営史研究所編『日本郵船株式会社百年史』・『日本郵船百年史資料』日本郵船株式会社、一九八八年）

大黒屋支店【明治32・6・16】明治二〇年（一八八七）『福井県下商工便覧』に「諸国御定宿　敦賀冨貴町　大黒屋事　浅田栄助」、「諸国御定宿　敦賀港金ヶ崎ステンション前　大黒屋浅田栄助支店」とあり、店の様子が描かれている。（川崎源太郎編、竜泉堂、一八八七年、国立国会図書館デジタルコレクション）。

矢田方【明治32・6・17、明治31・32年日記覚え書112・上】矢田長之助・千代子（千代）家。千代子は渡部寛一郎の娘。夫・長之助については『注釈1』【明治31・9・13矢田方】参照。

柳原、西田美津穂兄妹、増田力、湯原某【明治32・6・17】

松平邸、伯様、伯爵【明治32・6・18、19、22、23、24、25、28、29、7・3、5、明治31・32年日記覚え書115・下】松平直亮邸および松平直亮。前出（『注釈1』【明治31・9・28】）

安井【明治32・6・18、19、22、23、25、28、7・7、10、明治31・32年日記覚え書115・下】安井泉。前出（『注釈1』【明治31・9・28】）

山口【明治32・6・18、19、23、25、28、7・10、明治31・32年日記覚え書115・下】山口亮。？―大正一二年（一九二三）　松江藩主松平直政の乳兄弟を初代とする、山口七郎右衛門家九代目。幕末の動乱期に長州征討や奥州出兵に従軍し、維新後、松江藩少参事。明治二一年（一八八八年）一月から大正四年（一九一五）一一月旧松江藩主松平家の家扶。東京に移住し松江市と旧藩主家との仲立ちや、郷里に貢献した。『令和元年特別展　海将山口多聞を生んだ松江藩士山口家―近代日本の礎となった人々―』松江歴史館、二〇一九年。なお、山口亮の家扶の期間については、松江歴史館の新庄正典氏にご教授いただいた。

本郷大学【明治32・6・18】、山本邦【明治32・6・18】山本邦之助。前出（『注釈1』【明治31・9・13】）

謙一郎【明治32・6・20、21、26、27、7・6、12、13、14、15、明治31・32年日記覚え書113・下】渡部謙一郎。渡部寛一郎の息子。明治三〇年（一八九七）三月松江中学卒、明治三四年（一九〇一）七月第一高等学校にて大学予科（第一部法科〈英法〉）卒業、同年一〇月東京帝国大学法科大学政治学科入学、明治三八年（一九〇五）七月東京帝国大学法科大学法律学科（独逸法兼修）卒業と同一人物か。（『北高』、「官報」【明治34・7・3、10・9、明治38・7・13】）

島津公別邸【明治32・6・24】鎌倉。松平直亮伯を訪問。直亮の夫人充子は公爵島津忠重姉。松平直亮については『注釈1』【明治31・9・28】参照。大橋良平「現在の鎌倉」（明治四五年〈一九一二年〉）に島津忠重の別荘地として「相州鎌倉長谷二〇二」「同（相州鎌倉長

谷）一の鳥居」とあり、また、島津忠済（玉里島津家。明治維新当時の事実上の藩主〈国父〉島津久光が初代。公爵）の別荘地として「同（相州鎌倉長谷）由井ヶ浜」があがっている。『しらゆき―島津忠重・伊楚子追想録―』によると、長谷の別荘は明治三三年（一九〇〇）に出来たこと、一の鳥居邸は明治四五年（一九一二）新築であること、また明治三一年（一八九八）の夏休み中に忠重が玉里別荘（玉里島津家、島津忠済家）で過ごしたと記されており、松平直亮らが滞在していたのは島津忠済の別荘だろうか。（大橋良平「現在の鎌倉」一九一二年〈島本千也『海辺の憩い　湖南別荘物語』二〇〇〇年〉、島津出版会『しらゆき―島津忠重・伊楚子追想録―』一九七八年）

武部、秋上【明治32・6・25】、**中村**【明治32・6・26】、**木邨峰**【明治32・6・26】木村峰之助。【明治31・32年日記覚え書115・上】参照。

千代（千代子）【明治32・6・27、7・6、11、明治31・32年日記覚え書111・下】矢田千代（千代子）。渡部寛一郎の娘。夫・矢田長之助については『注釈1』【明治31・9・13矢田方】参照。

江木方【明治32・6・27】神田町淡路町（千代田区神田淡路町）。江木写真店か。明治一三年（一八八〇）、江木松四郎がアメリカからソーラーカメラ、写真引伸器械を取り寄せ、京橋区山城町に写真業を開業。松四郎は、兄・保男のすすめでサンフランシスコで写真術を研究、帰国後、明治一七年（一八八四）保男は松四郎を写真師として神田淡路町に江木写真店（江木本店）を開く。明治二四年（一八九一）新橋に六階建ての塔をもつ江木写真店支店（福山館、江木塔）を開き、評判になる。（江木五十嵐写真店百年の歩み刊行委員会『江木五十嵐写真店百年の歩み』一九八五年、小沢健志監修・高橋則英編集『レンズが撮らえた日本人カメラマンの見た幕末明治』二〇一五年、山川出版社）

東明館勧工場【明治32・6・27】明治二五年（一八九二）四月、小川町通りの裏神保町一番地に開業。（『東京文学』）「裏表神保町の間なる通街、小川町に出でんとする所左に東明館を見る、其構造の大なるよりしても、其商品の多きよりしても、はた其陳列の整々たるよりしても、都下屈指の勧工場たり」（『案内記春』）

今用西洋料理店【明治32・6・27】『東京百事便』に「〇今用　神田一ツ橋通りにあり近来の家なれとも宏大なる赤煉瓦の垣を以て囲み立て庭も岩石なと数多積上岩山の上に離座敷を築きて美事なり西洋料理もあり」とある飲食店か。錦町は現東京都千代田区神田錦町一～三丁目で一ツ橋通りの東隣の町名。（『百事便』）

片山吉則【明治32・6・27】本郷金助街九番地寓所。島根県。令嬢幸子は「我県女子師範校卒業ニシテ、旧識アル」（「翻刻　渡部寛一郎日記1」『山陰研究10』【明治30・2・18】）。明治十四年（一八八一）東京大学製薬学科卒、明治一五年（一八八二）東京大学医学部準助教授として、オランダ人薬学者エイキマンの研究を翻訳している。明治一七年（一八八四）文部省御用掛専門学務局、明治一九年（一八八六）文部省総務局・学務局、明治二〇年（一八八七）～明治二一年（一八八八）文部省総務局・専門学務局、明治二五年（一八九二）～明治二六年（一八九三）文部省大臣官房文書課・専門学務局第一課兼第二課、明治二七年（一八九四）文部省専門学務局、明治二八年（一八九五）～明治二九年（一八九六）文部省大臣官房図書課・専門学務局第一課長兼第二課長、明治三〇年（一八九七）文部省高等学務局・図書局、（明治三一年『職員録（甲）』欠）、明治三二年（一八九九）文部省専門学務局、明治三三年（一九〇〇）文部省専門学務局第一課長兼第二課長、明治三三年（一九〇〇）六月二一日京都帝国大学医科

大学助教授、明治三四年（一九〇一）～明治四一年（一九〇八）京都帝国大学（京都）医科大学助教授・附属医院事務監督、明治四一年（一九〇八）六月～大正一二年（一九二三）京都帝国大学京都医科大学（のち医学部）附属医院薬局長。（安江政一「日本への近代薬学導入のいきさつ（一）」『薬史学雑誌』Vol.23、no.2、一九八八、日本薬史学会、『職甲』、『文部省職員録』、「官報」、堀岡正義・鶴岡道雄「明治時代の病院薬局」『病院薬学』三（二）、一九七七年、日本病院薬剤師会、国立国会図書館デジタルコレクション、勤務年は主に『職甲』で確認できた年）

斉藤熊【明治32・6・28】斉藤熊太郎。福井県。明治二一年（一八八八）三月五日～明治二三年八月（一八九〇）尋常師範学校校長補、兼尋常中学校長（明治二一年〈一八八八〉渡部寛一郎は尋常師範学校助教諭）。明治二三年（一八九〇）八月五日～明治二九年（一八九六）六月一一日島根県尋常師範学校長。（『北高』、『職乙』、「官報」）

学海指針社【明治32・6・28】明治三三年（一九〇〇）同社出版の『文学博士根本通明・文学博士井上円了両先生講話』の奥付は「東京市日本橋区通油町十六番地」、「代表者水島慎次郎」（国立国会図書館デジタルコレクション）。

井筒屋【明治32・6・28】浜町、**数藤、広江**【明治32・6・29】

梶山視学官【明治32・6・30】梶山延太郎。牛込神楽坂三丁め。慶応二年（一八六六）―昭和一二年（一九三七）、広島県。明治二五年（一八九二）帝国大学法科大学卒。明治三〇年（一八九七）文部省高等学務局（明治三一年〈一八九八〉『職甲』欠）、明治三二年（一八九九）文部省大臣官房図書課図書審査官、専門学務局、視学官。同年一月と三月に視学官として島根県へ出張を命じられる。静岡県（明治三三年〈一九〇〇〉～明治三四年〈一九〇一〉）、埼玉県（明治三五年〈一九〇二〉～明治三八年〈一九〇五〉）、山口県（明治三九年〈一九〇六〉～明治四一年〈一九〇八〉）、熊本県（明治四一年〈一九〇八〉～明治四三年〈一九一〇〉）、大阪府（明治四四年〈一九一一〉～大正二年〈一九一三〉）の視学官、事務官を歴任。大正二年（一九一三）七月～大正一三年（一九二四）四月大阪府立北野中学校長、大正一三年（一九二四）～昭和一〇年（一九三五）成器商業校長。短期間だが、大阪府立江戸堀高等女学校（現港高校）校長事務取扱も務めた。ほかに司法省、福岡県も勤務（年不明）。（勤務年は『職甲』、『職乙』、「官報」、『中等教育諸学校職員録』〈国立国会図書館デジタルコレクション〉で確認できた年年および大阪府立北野高等学校創立一二〇周年記念誌編集係編『北野百二十年』大阪府立北野高等学校／六稜同窓会創立一二〇周年記念事業委員会、一九九三年）

松崎故一郎【明治32・6・30】麻布仲ノ町。明治二年（一八六九）―大正五年（一九一六）　松江市。明治一九年（一八八六）七月島根県中学校初等科卒（同時期の高等科卒に野津金之助）。しばらく私塾で教鞭をとるが上京、明治二三年（一八九〇）東京物理学校卒業。帝国大学理科大学東京天文台に奉職。天文台技手として星学、天体重学を研究する。明治三三年（一九〇〇）、矢野恒太（のち第一生命保険相互会社設立、社長）と出会い、天文台を退職、同年日宗生命保険株式会社に入社、かたわら東京外国語学校に学ぶ。明治三五年（一九〇二）九月第一生命保険相互会社の創立とともに聘せられ、アクチュアリーに。二度海外留学を志すが体調の悪化により断念。明治四一年（一九〇八）秋より病を得、大正五年（一九一六）六月一日没。享年

四八歳。（編纂及発行者河原崎萬吉・山根真蔵『松崎故一郎君遺稿』一九一六年、『北高』）

岸【明治32・6・30】岸清一。前出（『注釈1』【明治31・9・19～21】）、**東洋汽船会社**【明治32・6・30】前出（『注釈1』【明治31・9・29】）、**野津**【明治32・6・30】野津金之助。前出（『注釈1』【明治31・9・29】）、**目次**【明治32・6・30、7・1】、**木村**【明治32・7・1】木村峰之助。【明治31・32年日記覚え書115・上】参照。

古川恵【明治32・7・1】「文部省専門学務局　属　七　古川恵」（『職甲』）

松本肉店【明治32・7・1】

原勝三郎【明治32・7・2】士官補候生。渡部寛一郎の次女ヨシの夫。明治二八年（一八九五）七月松江中学卒業生に「原勝三郎」とあり、同一人物か。（『北高』）

片寄文郎【明治32・7・2】幼年生。明治三〇年（一八九七）一〇月一一日発足の島根県第一尋常中学校学友会の「学友会雑誌」第一号（明治三一年二月）に、学友会の講談部委員の一人として名前が見える人物か。（『北高』）

野津金之助【明治32・7・2】前出（『注釈1』【明治31・9・29】）、**松崎故一郎**【明治32・7・2】前出（【明治32・6・30】）、**山本邦之助夫婦**【明治32・7・2】山本邦之助については前出（『注釈1』【明治31・9・13】）、**野村繁**【明治32・7・2】要塞砲兵少尉、**広江氏**【明治32・7・3】

上野公園【明治32・7・4】江戸随一の花の名所として知られた上野の山が上野公園となったのは明治六年（一八七三）四月。明治九年（一八七六）内務省所管。明治一〇年（一八七七）八月からの第一回以来、しばしば内国勧業博覧会の会場になった。上野戦争の彰義隊史跡、西郷隆盛像の銅像などのほか、東京国立博物館、国立西洋美術館、国立科学博物館、東京都美術館、上野動物園、東京都文化会館、東京芸術大学、日本学士院、上野図書館（国立国会図書館支部）など、文化・芸術の施設が多い。（『東京文学』）

動物園【明治32・7・4】上野動物園。明治一五年（一八八二）三月二〇日、上野公園内に博物館の一部として設けられた日本で最初の本格的動物園。赤煉瓦や木造の小屋七棟に、猿・狐・狸・鶴・水牛など九一種の動物が収容された。入場料は日曜祭日二銭、平日一銭。子供はその半額で、第一日の入園者は七〇九人と記録されている。明治二〇年（一八八七）に虎が、翌年象が加わる。開園以来地域は七回にわたって拡張され、総面積約一二万九〇〇〇平方メートル、六五〇種近い動物を収容する大動物園となった。開園の明治一五年（一八八二）に二〇万五四五四人だった有料入園者数は、昭和三五年（一八六〇）には三〇〇万六七〇二人に達した。（『東京文学』）

商品縦覧所【明治32・7・4】『案内記春』の「内国商品陳列館」のことか。「竹の台の西方、南北左右翼を張る、長棟の建物を見ん、是れ即ち内国商品陳列館なり、本館は一の合資会社の組織、明治二十三年第三博覧会の後、其三号館を借り受くるもの、汎く商業上の見本を、此館に陳列して、洽く人に縦覧せしめ、傍ら需めに応じて、正札の販売をなす、要するに是れ市内普通の勧工場の大なる者なり、下足代一銭を払ふ、忽にして窈窕たる佳人の、薔薇花を手にし、愛嬌の靨を凹めて、目我を迎ふるあり、劈頭第一、先づ人を悩殺せんとす、之を睨視すれば、即ち箱入の活人形、是より玻璃内の棚整々、陳列品を山積し、珍物佳什の数を尽して、殆んど天下の精を蒐む、大は陶磁器、漆

器、宝石、太物、小間物類より、細は指物、細工物、玩戯物等に至るまで、数千百種、館内なる妙齢の女子十数名、紅粉を面にし、陳列品の間に周旋して、保管兼販売の重職に任ぜられ、又処々の休憩所は、目に盆栽、口に茶菓を供して、以て巧に客を釣る、聞く縦覧の客、春秋一日、平均二千五百人、冬季と雖ども五百人に下らす、平均一ヶ月の販売高二千五百円、乃至三千円の間にありと聞く」（『案内記春』）

雁鍋屋【明治32・7・4】がんなべや。上野山下の下谷区上野広小路町二〇番地（台東区上野四丁目）にあった鳥料理店。慶応元年（一八六五）刊行の『歳盛記』には、上野の料理屋として名前があがる。入り口の漆喰壁に鏝細工の名人伊豆の長八がこしらえた雁三羽の浮き彫りがあるので知られた。しかし明治三〇年（一八九七）ごろには下り坂となり、明治三九年（一九〇六）廃業。（『東京文学』）

浅草公園【明治32・7・4】もと浅草寺の境内だった地域で、明治六年（一八七三）二月に公園として七区に分かたれた。なかでも仲見世、奥山、六区などが庶民的な歓楽地としての浅草を代表していた。戦後、新憲法による政教分離の主旨から社寺境内地が公園でなくなり、浅草公園も昭和二六年（一九五一）一〇月に廃止されている。多くの文学作品に描かれている。（『東京文学』）

浅草動植物園【明治32・7・4】浅草公園第五区の俗称奥山に設けられた遊園地花屋敷のことか。植木屋森田六三郎が輪王寺宮から賜わった浅草公園地に明治一八年（一八八五）三月花屋敷を開く。明治一九年（一八八六）三月動物園や植物園を兼ねた遊園地に変わる。園内には、屋上に金鶏をいただく五層の楼閣があり、「奥山閣」の名で呼ばれていた。昭和の「浅草楽天地」時代をへて、現在は「花屋敷遊園地」となっている。（『東京文学』）

五階楼【明治32・7・4】『最新東京案内記　夏の巻』によると、花屋敷の門を入るとまず「五層楼」が目につき、「園内左右の小径を挿んで」種々の植物、菊細工、押絵、人形、蓄音機、西欧「ジヨウラマ」、鳥類、動物などが展示されているという。日記中で、渡部が「蓄音器ニテ数種ノ流行節ヲ聞キ」とあるのはこの蓄音機のことだろうか。さらに、続けて「これより小丘をよぢて五層楼に上る（略）、玄関の上り口には、碁盤形磨きの大理石を敷き、正面に万歳楽の図を掲げたり、次の間の床は、亀甲形の黒柿にして、箱入剥製の麝香猫あり、壁間には、蕭疎静日松涛起、宛似蒼龍作雨吟　と題せる二柱聯を掲げ、別に絹地織出しの、仏国工業家「レセップ」の肖像額面あり、尚勝伯寄する処の獅子、古面の置物あり、更に進むに従ひ、益々その荘厳に驚くべし。三階に登れば、天梛樹の床柱、玉造りの壁間、見る目もさむるばかりに、草木花卉等、種々の模様を鏤め、錦上更に花を着くるの感あり、四階には露れ椽に施し珠の欄干あり、五階は最も眺望に富み、四方の簷（のき）には、金燈籠を吊し、屋上の金鶏儼立殆ど鳴かんとす」。（『案内記夏』）

上代謙蔵【明治32・7・5」「翻刻　渡部寛一郎日記1」『山陰研究10』【明治30・2・26】の人物か。

教育品製造会社【明治32・7・6】「書籍什具を除くの他教育に関する総ての機械又は金石動植物等の標本を製造発売す　教育品製造会社浅草区七軒町二番地」（『百事便』）

石井信敬【明治32・7・6】前出（『注釈1』【明治卅二年四月調】）

春子【明治32・7・6】矢田春子。矢田長之助、千代子の娘。

桑原羊次郎【明治32・7・7】前出（『注釈1』【明治卅二年四月調】）、**園山知事**【明治32・7・8】園山勇。前出（『注釈1』【明治

31・9・19～21】）

足立鍬【明治32・7・8】足立鍬太郎。慶応二年（一八六六）？―昭和七年（一九三二）　松江市。明治一七年（一八八四）松江師範学校卒。邇摩郡温泉津小を振り出しに一〇年間県内小学校訓導や校長職に精励、明治二七年（一八九四）～明治二八年（一八九五）新潟県尋常中学校、明治二八年（一八九五）～明治三〇年（一八九七）頃島根県第一尋常中学校助教諭、（明治三一年〈一八九八〉『職乙』欠）、明治三二年（一八九九）山形県米沢尋常中学興譲館教諭、明治三三年（一九〇〇）～明治四五年（一九一二）長野県内中学校教諭・校長（長野中学校教諭、同飯山分校教諭、飯山中学校長、諏訪中学校長）、一九一二年～大正一〇年（一九二一）静岡県加茂郡立中学豆陽学校（のち静岡県立豆陽中学校）校長、大正一〇年（一九二一）～大正一三年（一九二四）静岡県志太郡島田高等女校（のち静岡県島田高等女学校）校長などを歴任。静岡市史、静岡県史等の編纂に携わり、なかでも『静岡県史』第二巻（一九三一年）の大半を執筆、原始～奈良時代の静岡県通史として高く評価されている。安倍川研究をすすめ、登呂遺跡の存在を予告。二男赳は国語学者で衆議院議員、広瀬の井上家を継いだ（井上赳）。（『島根歴史』、静岡新聞社出版局『静岡県歴史人物事典』静岡新聞社、一九九一年、『職乙』、『職員録』、『新潟県学校職員録』、勤務年は主に『職員録』、『職乙』で確認できた年）

原林【明治32・7・8】

野津左馬【明治32・7・8】野津左馬之助。慶応三年（一八六七）―昭和一八年（一九四三）　明治二一年（一八八八）島根県尋常中学校を卒業後、各地小学校教諭勤務を経て、明治三〇年（一八九七）～明治三二年（一八九九）島根県第一尋常中学校、明治三三年（一九〇〇）～明治三六年（一九〇三）長野県長野中学校、（なお、明治三〇年〈一八九七〉、明治三三年〈一九〇〇〉～明治三五年〈一九〇二〉は足立鍬太郎と同僚）明治三七年（一九〇四）～明治四二年（一九〇九）島根県第三中学校・杵築中学校に勤務して退職。明治四四年（一九一一）から昭和五年（一九三〇）までの間、島根県史編纂委員として『島根県史』全九巻を編纂した。その間『飯石郡誌』『鹿足郡誌』『大原郡誌』その他を編纂発行している。特に島根県の考古学界の草分け的役割を果たしたが、松江市の古墳・山代二子塚に対して「前方後方墳」の型式名を提唱したことで著名。（『島根歴史』、勤務年は『職乙』で確認できた年）

善光寺【明治32・7・8】長野市にある浄土・天台両宗の管理に属する寺。定額山。本尊阿弥陀如来立像。現本堂は宝永四年（一七〇七）建立。（「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典20長野県』角川書店、一九九〇年）

藤屋本店【明治32・7・8】長野市大門町。旧北国街道善光寺宿の本陣として長い歴史を持つ旅館。当初、善光寺宿の本陣は世襲ではなかったが、藤井家（世襲名平内・平五郎）四代目平内が安永五年（一七七六）本陣を勤めて以降、九代平五郎欽昌まで六代続けて本陣を勤めた。明治二五年（一八九二）欧風要素を取り入れた木造三層楼に建て替え、「對旭館（たいきょくかん）」と称した。長野停車場前には支店もあった。「長野停車場に下れば右角に三層楼あり、是を對旭館藤屋支店とす　其本店は大門町に欧風三層の建築、日本風高楼と並び巍然として人目を驚かし、正門両側には松と柳の二大樹あり、万人足を止めて暫く凝視する所なり（略）旧幕時代善光寺御本陣として、参勤交代の諸侯は必ず投宿せられし旧家にして幾十年の大旅館なれば

内外の装飾、起臥飲食の調度等毫も遺憾を感ぜざるなり」（『長野繁盛記』）。大正一四年（一九二五）洋風建築に改築、平成九年（一九九七）に国の登録有形文化財（建造物）に登録される。（「THE FUJIYA GOHONJIN」https://www.thefujiyagohonjin.com、ウィキペディア藤屋（長野市）https://ja.wikipedia.org/wiki/藤屋_（長野市）、藤屋を愛する会編『御本陳藤屋』龍鳳書房、一九九四年、岩井熊蔵『長野繁盛記　一名善光寺案内』丸上商店、一九〇四年、国立国会図書館デジタルコレクション）

木邨【明治32・7・10】木村峰之助。【明治31・32年日記覚え書115・上】参照、**片山**【明治32・7・10】片山吉則。前出（【明治32・6・27】）、**古川**【明治32・7・10】古川恵。前出（【明治32・7・1】）

明治義会【明治32・7・10】明治義会尋常中学校。塩谷吟策が明治二三年（一八九〇）一一月開校。明治二九年（一八九六）一一月時点で、麹町区富士町四丁目。別に寄宿舎あり。校長塩谷吟策。教員二四名。生徒五六三名。尋常中学校の程度によりて、倫理、国語、漢文、英語、その他学科を教授。修業年限五ヶ年。学年は四月一日から翌年三月末日。学費は束修金一円、授業料は一ヶ月金一円五〇銭。明治三九年（一九〇六）三月三一日限りで廃校。（千代田区教育委員会『千代田区教育百年史　上巻』千代田区、一九八〇年、『東京遊学』、「官報」【明治38・12・23】）

塩谷吟策【明治32・7・10】明治義会尋常中学校長。安政六年（一八五九）―大正一一年（一九二二）　群馬県。明治一四年（一八八一）東京師範学校卒。福島県師範学校教諭を経て明治一五年（一八八二）長野県師範学校助教諭。明治一七年（一八八四）一一月附属小学校訓導を兼務し、能勢栄校長の開発教授導入に協力してその普及に努める。その後、明治一八年（一八八五）一月東筑摩郡開智小学校長に就任、また明治一七年（一八八四）八月東筑摩郡私立教育会が創立され、初代会長になるが、明治一九年（一八八六）九月校長を辞職して長野県から去る。明治二三年（一八九〇）明治義会尋常中学校を開校、校長に。明治三六年（一九〇三）歌人の竹屋雅子と結婚。明治三九年（一九〇六）三月明治義会尋常中学校廃校。明治四〇年（一九〇七）一月東洋インキ製造株式会社設立時の監査役。大正一一年（一九二二）五月八日没。（神津良子編『長野県歴史人物大事典』郷土出版社、一九八九年、松本市編集『松本市史　第二巻　歴史編三近代』松本市、一九九五年、重要文化財旧開智学校資料集刊行会編集『史料開智学校　第二一巻』電算出版企画、一九九八年、芳賀豊ほか監修『日本女性人名辞典（普及版）』日本図書センター、一九九八年、東洋インキ製造『印刷インキの歩み　東洋インキ六十年史』一九六七年、「読売新聞」【大正11・5・10】）。

蓬莱亭【明治32・7・10】四谷仲町（現新宿区四谷一丁目、若葉一丁目あたり）、**梅**【明治32・7・11】梅謙次郎。前出（『注釈1』【明治31・9・13】）、**塩谷**【明治32・7・11】前出（【明治32・7・10】）、**林視学官**【明治32・7・11】、**松崎**【明治32・7・12】松崎故一郎。前出（【明治32・6・30】）、**教育会社**【明治32・7・12】教育品製造会社。前出（【明治32・7・6】）、**山本邦之助**【明治32・7・12】前出（『注釈1』【明治31・9・13】）、**善継**【明治32・7・13】渡部善継。前出（『注釈1』【明治31・10・3ほか】）、**難波停車場**【明治32・7・13】

天下茶屋【明治32・7・13】昭和四年（一九二九）から現在の町名（現在は大阪市西成区天下茶屋一～三丁目、北一～二丁目、東一～二

丁目）。もと勝間新家と称したが、芽木光立が武野紹鴎の旧地に天正年間茶店を出し、豊臣秀吉がこの茶屋で休憩したことから殿下茶屋、天下茶屋と呼ばれるようになったという。ただし、この天下茶屋は現西成区岸里東一～二丁目付近で、戦前には中二階の本葺きの屋根の建物があったが、戦災で失った。また、明治二十年（一八八七年）頃、橋本尚四郎、久五郎兄弟が聖天坂の道路開発、阪堺電気軌道北天下茶屋、聖天坂停留所設置に尽力。現阿倍野区橋本町には天下茶屋遊園地も設置した。料亭などを設置し、自然条件を生かした、公園のようなものを目論んだようである。（「角川日本地名大辞典」編纂委員会『角川日本地名大辞典27大阪府』角川書店、一九八三年、三善貞司『大阪史蹟辞典』清文堂出版株式会社、一九八六年）

栄城丸【明治32・7・15】栄城丸（I）。二四七五トン、明治一三年（一八八〇）七月イギリス・ニューカッスルにて建造。二連成。旧名アルトノワー、鉄船。日清戦争（一八九四～一八九五年）により日本郵船の一〇〇〇総トン以下の社有船も御用船として徴用されたため、明治二八年（一八九五）この船を購入したが、購入と同時に御用船となった。大部分の御用船が解除されたのは明治二九年（一八九六）一月に入ってから。明治三五年（一九〇二）頃、熊本丸同様、横浜・神戸・小樽線（西回り）就航。明治四二年（一九〇九）売却される。（財団法人日本経営史研究所編・日本郵船株式会社発行『日本郵船株式会社百年史』・『日本郵船百年史資料』一九八八年）

山田恒、木村林【明治32・7・15】、**塩野仙六、塩野房四郎、塩野長右衛門**【明治32年日記末尾】

渡部善継【明治31・32年日記覚え書116・下】大坂西区九条番外二五六一。前出（『注釈1』【明治31・10・3ほか】）

渡部金一郎【明治31・32年日記覚え書115・上】本郷森川町一番地橋通住田三ツ方。明治二七年（一八九四）七月松江中学卒業生か。（『北高』）

横沢文也【明治31・32年日記覚え書115・上】京橋区元数寄屋町二丁め三番　細井長助方。前出（『注釈1』【明治31・9・13】）、**浅井郁太郎**【明治31・32年日記覚え書115・上】牛込若宮町三二白石内。前出（『注釈1』【卅二年頃県外礼状】）。

木村峰之助【明治31・32年日記覚え書115・上】小石川区小石川水道町三九。島根県。明治一四年（一八八一）二月段階で（島根県）警察本署御用係、明治一五年（一八八二）六月～明治二二年（一八八九）出雲楯縫神門郡書記（明治一五年〈一八八二〉六月～明治一六年〈一八八三〉二月渡部寛一郎の弟・渡部善継も同書記）、明治二三年（一八九〇）島根県第二部、明治二四年（一八九一）～明治二九年（一八九六）島根県内務部、明治三〇年（一八九七）島根県第三課、（明治二六年〈一八九三〉～明治三〇年〈一八九七〉は兼小学校教員検定委員）、明治三〇年（一八九七）文部省大臣官房会計課、（明治三一年『職甲』欠）、明治三二年（一八九九）～明治四四年（一九一一）文部省専門学務局。（『島根県職員録』、『職甲』、『職乙』、勤務年はこれら『職員録』で確認できた年）

高等商業学校【明治31・32年日記覚え書115・上】現一橋大学。明治八年（一八七五）森有礼が東京尾張町に私設した商法講習所が、翌年東京府に移管、明治一七年（一八八四）農商務省直轄となり東京商業学校と改称、明治一八年（一八八五）五月文部省に移管、同年九月東京外国語学校および同校所属高等商業学校と合併して神田区一橋通町一番地に移転した（一橋大学の名称起源）。さらに明治二〇年（一八八七）高等商業学校と改称、明治三〇年（一八九七）には専攻科

および附属外国語学校を併設し、明治三二年（一八九九）附属商業教員養成所も附設、明治三五年（一九〇二）東京高等商業学校と改称した。大正七年（一九一八）東京商科大学、昭和二四年（一九四九）一橋大学。（『国史』）

池田守吉【明治31・32年日記覚え書115・上】牛込区弁天町百十一番地、**曽田忠太**【明治31・32年日記覚え書115・上】本郷弓町二ノ三宮本方、**江原素六**【明治31・32年日記覚え書115・上】麻布鳥居坂尋常中学校内。前出（『注釈1』【明治31・9・19～21】）、**山本氏**【明治31・32年日記覚え書115・上】神奈川町青木臺町七九、**西村賢**【明治31・32年日記覚え書115・上】江戸川町十六番松橋内

茗渓会【明治31・32年日記覚え書115・下】本郷区元町二丁め六十六番地。現筑波大学同窓会。筑波大学は昭和四八年（一九七三）、東京教育大学（昭和二四年〈一九四九〉五月設立）を母体として創立されるが、東京教育大学の前身のひとつ、東京師範学校（明治五年〈一八七二〉五月創設、明治一九年〈一八八六〉四月東京高等師範学校に）の卒業生によって明治一五年（一八八二）四月二九日、茗渓会設立（東京茗渓会と称す）。その後、東京教育大学に合併される東京農業教育専門学校、東京体育専門学校の各同窓会（「駒場会」「翔陽会」）と合併し、今にいたる。渡部寛一郎は県から師範学科取調員として、明治一五年（一八八二）～明治一六年（一八八三）、東京師範学校に学んでいる。（一般社団法人茗渓会ＨＰ http://www.meikei.or.jp/about、『国史』、『北高』）

農科大学内獣医科【明治31・32年日記覚え書115・下】東京帝国大学農科大学。現在の東京大学農学部。農科大学には農学科、農芸化学科、林学科、獣医学科の四学科（修業年限三年）と、実業者を養成するためにさらに農学科、林学科、獣医学科には乙科が置かれていたが（『東京遊学案内　中編』少年園発行、一八九八年、国立国会図書館デジタルコレクション）、明治三一年（一八九八）五月一四日付「官報」では、この乙科の募集を停止し、現生徒卒業後は乙科を廃止、また次学年より実科を設置するとしており、同年九月八日付『東京朝日新聞』にも、世運の進歩に伴い乙科学科程度に改正を加え、実科と称し、入学程度を高め尋常中学卒業者またはこれに相当する学力ある者を入学させることにして再募集入学試験を行うこと、また、実科生で陸軍獣医官志願者には月々相当の学資金を支給することに内定したという記事が載っており、渡部のメモは、この改正にともなう試験の変更に関するものと思われる。

松原新之助【明治31・32年日記覚え書115・下】湯島三組町八一。嘉永六年（一八五三）―大正五年（一九一六）　松江市。明治元年（一八六八）、洋式操練の際少年隊長に。明治四年（一八七一）上京、英独語を学び、東京大学医学部で生物学を学び、魚類学を専攻。教場補助となり明治九年（一八七六）外科医学教授、明治一一年（一八七八）駒場農学校教授。明治一二年（一八七九）ドイツのベルリン大学で水産動物学を研究し明治一四年（一八八一）帰朝、大学助教となり、大日本水産会幹事を兼ね、明治二〇年（一八八七）農商務省技師となり第一高等学校教授を兼務。ついで水産講習所所長、勅任技師。各種水産共進会に審査部長として賛翼し、斯業の奨励発達に寄与した。（『平』）

和田玉一【明治31・32年日記覚え書115・下】日本橋浜町三丁目壱番地へ九号、**高木豊三**【明治31・32年日記覚え書115・下】牛込区東五軒町四十四。前出（『注釈1』【明治31・9・19～21】）、**大谷君**【明治31・

32年日記覚え書115・下】本郷区森川町一番地一七五岡田方

福岡修猷館【明治31・32年日記覚え書115・下】現福岡県立修猷館高等学校。藩校修猷館が明治四年（一八七一）に廃止された後、旧藩主黒田長溥が旧藩士金子堅太郎の献策を採用し、明治一八年（一八八五）英語専修修猷館設立、その後明治二二年（一八八九）廃校する尋常中学校生徒を併合し、県立尋常中学修猷館に。明治三二年（一八九九）福岡県中学修猷館、明治三三年（一九〇〇）純然たる県費支弁の学校となるまでは黒田家の補助で維持される。明治三四年（一九〇一）県立中学修猷館、大正一四年（一九二五）県中学修猷館と改称し、昭和二三年（一九四八）県立高等学校修猷館、翌年県立修猷館高等学校と改称した。創立以来質実剛健、自由闊達の校風と伝統を保って、福岡県を代表する名門校として全国に知られる。（西日本新聞社福岡県百科事典刊行本部編集『福岡県百科事典　上』西日本新聞社、一九八二年）

隈本有尚【明治31・32年日記覚え書115・下】日本橋区岩付町三番地野沢十右衛門方。福岡修猷館長。万延元年（一八六〇）―昭和一八年（一九四三）　福岡県。明治一七年（一八八四）東京大学理学部星学科卒業と同時に、同大学予備門教諭に任命され、同時に大学御用掛を兼ね、準助教授（星学教室）に補せられた。明治一八年（一八八五）～明治二二年（一八八九）修猷館初代館長（英語専修修猷館、のち福岡県立尋常中学修猷館）、その後山口高等中学校教頭、再び明治二七年（一八九四）修猷館館長に。明治三四年（一九〇一）文部省視学官、明治三五年（一九〇二）十月哲学館事件を起こした。次に東京高等商業学校（現一橋大学）教授。明治三六年（一九〇三）から官命によりヨーロッパ・アメリカ留学、明治三八年（一九〇五）～長崎高等商業学校初代校長、その後統監府中学校長に転じた。大正二年（一九一三）退職。留学中人智学の創始者ルドルフ・シュタイナーや占星術家アラン・レオらと出会い、西洋占星学やシュタイナーの紹介をする。（篠原正一『久留米人物誌』久留米人物誌刊行委員会、一九八一年、河西善治『『坊ちゃん』とシュタイナー　―隈本有尚とその時代―』ぱる出版、二〇〇〇年、修猷館二百年史編集委員会編『修猷館二百年史』修猷館二〇〇年記念事業委員会発行、一九八五年、「官報」、『職乙』、『職甲』）

東奥義塾【明治31・32年日記覚え書115・下】現東奥義塾高等学校。明治五年（一八七二）一一月、慶応義塾に学んで帰った元弘前藩士菊池九郎らが中心となり、旧藩校稽古館の校舎を利用して私立東奥義塾として発足。創立当初よりキリスト教主義学校。大正二年（一九一三）経営難に陥り廃校となったが、関係者の努力で大正一一年（一九二二）四月再興、笹森順造を塾長に迎えて新発足。昭和二三年（一九四八）四月の学制改革により現校名（普通科）となる。（『青森県百科事典』東奥日報社、一九八一年）

杣山寿之進【明治31・32年日記覚え書115・下】杣山壽之進。東奥義塾長。元治元年（一八六四）―昭和二〇年（一九四五）　青森県。代々弘前藩の要職を務めてきた杉山家に生まれる。東奥義塾に学び、東京府立中学校に転じ、第一高校から東京大学法学部に入学し卒業した。明治二五年（一八九二）、青森県税務署に勤務したが明治二八年（一八九五）、県立第二中学の教諭となった。明治三〇年（一八九七）、私立東奥義塾長（図書館長兼務）となったが、明治三四年（一九〇一）に「弘前市立弘前中学東奥義塾」に移管するとその塾長となり、弘前市立図書館長を兼任する。大正二年（一九一三）東奥義塾廃校となり、

県立弘前中学教諭および舎監となる傍ら東奥義塾の財務関係の維持にあたる「東奥義塾育英会」理事を務める。大正一二年（一九二三）、現在の柴田学園の前身である「弘前和洋裁縫女学校」が設立されると、その教員を長く務めた。（東奥日報社編『青森県人名事典』東奥日報社、二〇〇二年）

柴田柴一郎【明治31・32年日記覚え書115・下】牛込矢来町一番地。明治三年（一八七〇）―明治三九年（一九〇六）安来市。母里小学校卒。島根県第一中学校入学。明治一九年（一八八六）一二月上京、東京英語学校で一年学ぶが、故あって帰国。明治二五年（一八九二）再び上京、東京哲学館、東京数学院、国民英学会等に学ぶ。明治二六年（一八九三）九月文科大学哲学撰科生として入学、明治二九年（一八九六）六月卒。日本銀行入行、いくばくもなく辞める。明治三二年（一八九九）七月～明治三三年（一九〇〇）九月新潟県北蒲原中学校。同年一二月～明治三五年（一九〇二）一一月兵庫県洲本中学校長。明治三六年（一九〇三）六月東京で『実践進徳篇』を著すが、病を得て帰国。明治三八年（一九〇五）四月～明治三九年（一九〇六）三月大坂府茨木中学校。明治三九年（一九〇六）七月没。享年三七。以上、『柴田柴一郎遺稿』による。遺稿集出版頒布、校正、費用分担等については、弟の柴田齢次、矢田長之助（渡部寛一郎の娘婿、柴田の友人）、坂田重二郎、伊原敏郎、大谷正信、高橋龍雄、高橋慶太郎、数藤斧三郎、公田連太郎が協力している。（『柴田柴一郎遺稿』柴田齢次発行、一九〇七年、国立国会図書館デジタルコレクション）

山崎光亨【明治31・32年日記覚え書115・下】神戸下山手通七丁め二二。

松平直哉【明治31・32年日記覚え書115・下】『注釈1』松平母里公。【明治31・9・26】参照。

足羽家従【明治31・32年日記覚え書115・下】足羽仲次郎か。（「翻刻渡部寛一郎日記1」『山陰研究10』【明治30・2・26】）

香川方【明治31・32年日記覚え書113・下】前出（『注釈1』【明治31・9・9】）、**大黒屋支店**【明治31・32年日記覚え書113・下】前出（【明治32・6・16】）、**楳**【明治31・32年日記覚え書112・下】梅謙次郎。前出（『注釈1』【明治31・9・13】）、**清水**【明治31・32年日記覚え書112・下】、**数藤**【明治31・32年日記覚え書111・上】、**秋上**【明治31・32年日記覚え書111・下】、**春子**【明治31・32年日記覚え書111・下】前出（【明治32・7・6】）、**目次**【明治31・32年日記覚え書111・下】、**善光寺**【明治31・32年日記覚え書109・上】、**塩谷**【明治31・32年日記覚え書109・下】塩谷吟策。前出（【明治32・7・10】）

およし【明治31・32年日記覚え書109・下】渡部寛一郎の次女ヨシ。夫は原勝三郎。

ま起（まき）【明治31・32年日記覚え書109・下】渡部まき。渡部寛一郎の妻。

林視学官【明治31・32年日記覚え書108・上】、**山本**【明治31・32年日記覚え書108・上】山本邦之助。前出（『注釈1』【明治31・9・13】）、**島津邸**【明治31・32年日記覚え書108・下】前出（【明治32・6・24】）、**天下茶**【明治31・32年日記覚え書107・上】

春の【明治31・32年日記覚え書107・上】渡部善継の子。渡部寛一郎の姪。

浪花【明治31・32年日記覚え書107・上】渡部善継の子。渡部寛一郎の姪。

慶之進【明治31・32年日記覚え書107・上】渡部善継の子。渡部寛一郎

の甥。

大黒屋【明治31・32年日記覚え書107・上】**大黒屋支店**（【明治32・6・16】）参照。

〔五〇音順人名・用語一覧索引〕

あ　**愛知銀行**【明治31・9・19～21】**青柳亭**【明治31・9・23】**明石旧城址**【明治31・10・6】**秋上**【明治32・6・25、明治31・32年日記覚え書111・下】**浅井郁太郎**【卅二年頃県外礼状、明治31・32年日記覚え書115・上】**浅草公園**【明治32・7・4】**浅草動植物園**【明治32・7・4】**足羽家従**【明治31・32年日記覚え書115・下】**足立鍬**【明治32・7・8】

い　**飯田館**【明治31・9・13】**池田守吉**【明治31・9・16、卅二年頃県外礼状、明治31・32年日記覚え書115・上】**石井信敬**【明治卅二年四月調、明治32・7・6】**板持**【明治31・9・29、10・1、2】**市川**【明治31・10・1】**井筒屋**【明治32・6・28】**伊藤恵市**【明治31・9・12】**井上先生**（**井上哲次郎**）【卅二年頃県外礼状】**今用西洋料理店**【明治32・6・27】**岩崎家**【明治31・9・12】

う　**上野清**【明治31・9・25、30】**上野公園**【明治32・7・4】**薄井**【明治31・9・19～21、30】**内田愼**【明治31・10・4】**内田文太郎**【明治卅二年四月調】**梅（楳）**【明治31・9・13、19～21、27、10・1、卅二年頃県外礼状、明治32・7・11、明治31・32年日記覚え書112・下】

え　**栄城丸**【明治32・7・15】**江木方**【明治32・6・27】**江原素六**【明治31・9・19～21、明治31・32年日記覚え書115・上】

お　**大浦兼武**【卅二年頃県外礼状】**大谷**【明治31・9・9、30、明治31・32年日記覚え書115・下】**大谷父子**【明治31・9・27】**尾崎大臣**【明治31・9・15、26】**お常**【明治31・9・12】**お角**【明治31・9・12】**およし**【明治31・32年日記覚え書109・下】音楽学校【明31・9・25】

か　**開花楼**【明治31・9・17、25】**香川方**【明治31・9・9、明治31・32年日記覚え書113・下】**学制研究会**【明治31・9・22】**花月亭**【明治31・10・6】**梶山視学官**【明治32・6・30】**柏田盛文**（文部省次官）【明治31・10・1】**片山**【明治31・9・14、卅二年頃県外礼状】**片山吉則**【明治31・10・1、明治32・6・27、7・10】**片寄文郎**【明治32・7・2】**学海指針社**【明治32・6・28】**加藤弘之**【明治31・9・24】**嘉納高等師範学校長**【明治31・9・22】**川口フール女学校**【明治31・10・4】**雁鍋屋**【明治32・7・4】

き　**岸清一**【明治31・9・19～21、29、明治32・6・30】**木村**【明治31・9・30、卅二年頃県外礼状】**木村峰之助**【明治31・10・1、明治32・6・26、7・1、10、明治31・32年日記覚え書115・上】**木村林**【明治32・7・15】**教育品製造会社**（**教育会社**）【明治32・7・6、12】**錦暉館**【明治31・9・22】

く　**隈本有尚**【明治31・32年日記覚え書115・下】**熊本丸**【明治31・9・9、明治32・6・15】**桑原羊次郎**【明治卅二年四月調、明治32・7・7】

け　**慶之進**【明治31・32年日記覚え書107・上】**謙一郎**【明治31・9・13、14、15、17、18、23、28、29、10・1、2、明治32・6・20、21、26、27、7・6、12、13、14、15、明治31・32年日記覚え書113・下】

こ　**高等商業学校**【明治31・32年日記覚え書115・上】**五階楼**【明治

32・7・4】

さ　**斉藤熊**【明治32・6・28】　**早乙女**【卅二年頃県外礼状】　**沢野氏**【明治卅二年四月調】

し　**塩谷**【明治31・9・14】　**塩谷吟策**【明治32・7・10、11、明治31・32年日記覚え書109・下】　**塩野仙六**【明治32年日記末尾195・上】　**塩野房四郎**【明治32年日記末尾195・上】　**柴田**【明治31・9・29、10・1、2】　**柴田柴一郎**【卅二年頃県外礼状、明治31・32年日記覚え書115・下】　**渋川千之助**【明治31・9・9、12】　**島末**【明治31・9・17】　**島田**【明治31・9・12】　**島田三郎**【明治31・9・19～21】　**島津公別邸**【明治32・6・24、明治31・32年日記覚え書108・下】　**清水**【明治31・9・30、卅二年頃県外礼状、明治31・32年日記覚え書112・下】　**聚星館**【明治31・9・19～21】　**修道館同窓会**【明治31・9・23】　**商船学校**【明治31・9・29】　**上代謙蔵**【明治32・7・5】　**衝濤館**【明治31・10・6】　**商品縦覧所**【明治32・7・4】　**新快漕丸**【明治31・9・9】

す　**水族館並和楽園**【明治31・10・5】　**数学院**【明治31・9・25、30】　**杙崎**【明治31・10・1】　**杙崎友一郎**【明治31・9・18、卅二年頃県外礼状】　**杙野**【明治31・9・13】　**杙原**【明治31・9・30、卅二年頃県外礼状】　**杙山寿之進**【明治31・32年日記覚え書115・下】　**数藤**【明治32・6・29、明治31・32年日記覚え書111・上】　**須磨寺**【明治31・10・6】　**諏訪善子**【明治31・10・4】

せ　**青年会館**【明治31・9・23】　**関根**【明治31・10・5、6】　**関根汀二**【卅二年頃県外礼状】　**泉岳寺**【明治31・10・2】　**善継**【明治31・10・3、4、明治卅二年四月調、明治32・7・13、明治31・32年日記覚え書116・下】　**善光寺**【明治32・7・8、明治31・32年日記覚え書109・上】　**全国中学校長会議**【明治31・9・15～26】

そ　**増上寺**【明治31・9・27】　**曽田忠太**【明治31・32年日記覚え書115・上】　**園山長野県知事**【明治31・9・19～21、明治32・7・8】

た　**大黒屋**【明治31・32年日記覚え書107・上】　**大黒屋支店**【明治32・6・16、明治31・32年日記覚え書113・下】　**高木豊三**【明治31・9・19～21、30、明治31・32年日記覚え書115・下】　**高藤直太郎**【明治31・9・12】　**竹田廣助**【明治卅二年四月調】　**武部**【明治32・6・25】　**武部繁之助**【明治31・9・18】　**段塚**【明治31・10・4、6】

ち　**千代子（千代）、千代（千代子）**→矢田千代子（千代）

て　**帝国教育会**【明治31・9・22、24】　**天下茶屋**【明治32・7・13、明治31・32年日記覚え書107・上】

と　**東奥義塾**【明治31・32年日記覚え書115・下】　**東海道汽車不通**【明治31・9・10、11】　**動物園**【明治32・7・4】　**東明館勧工場**【明治32・6・27】　**東洋汽船会社**【明治31・9・29、明治32・6・30】　**常盤亭**【明治31・9・28】　**常盤楼**【明治31・9・19～21】　**冨井**【明治31・9・19～21】

な　**中村**【明治31・10・6、明治32・6・26】　**中本章三**【卅二年頃県外礼状】　**浪花**【明治31・32年日記覚え書107・上】　**難波停車場**【明治32・7・13】

に　**西田美津穂兄妹**【明治32・6・17】　**西村賢**【明治31・32年日記覚え書115・上】　**西村茂樹（西村先生）**【明治31・9・30、卅二年頃県外礼状】　**西山**【明治31・9・23】

の　**農科大学内獣医科**【明治31・32年日記覚え書115・下】　**野津**【明治31・10・1】　**野津金之助**【明治31・9・29、明治32・6・30、7・

2】 **野津左馬**【明治32・7・8】 **野村繁**【明治32・7・2】

は **伯様、伯爵、伯爵邸**→松平家、松平邸、伯爵、伯様、伯爵邸 **狭間重亜**【卅二年頃県外礼状】 **馬入川アリ渡シアリ鉄路破損**【明治31・9・12】 **馬場**【明治31・9・12】 **林視学官**【明治32・7・11、明治31・32年日記覚え書108・上】 **原勝三郎**【明治32・7・2】 **原林**【明治32・7・8】 **春子**【明治32・7・6、明治31・32年日記覚え書111・下】 **春の**【明治31・32年日記覚え書107・上】

ひ **人丸神社**【明治31・10・6】 **樋野唯一**【明治31・9・12】 **平根**【明治31・9・19～21】 **広江**【明治32・6・29、7・3】 **広島明道中学校**【明治31・9・17】

ふ **風月堂**【明治31・9・19】 **福岡修猷館**【明治31・32年日記覚え書115・下】 **藤屋本店**【明治32・7・8】 **古川恵**【明治32・7・1、10】

ほ **蓬莱亭**【明治32・7・10】 **本郷大学**【明治32・6・18】 **本庄**【明治31・9・13】 **本荘太一郎**【明治卅二年四月調】

ま **ま起（まき）**【明治31・32年日記覚え書109・下】 **増田力**【明治32・6・17】 **松岡成高**【卅二年頃県外礼状】 **松崎故一郎**【明治32・6・30、7・2、12】 **松平**【明治31・9・15】 **松平家、松平邸、伯様、伯爵、伯爵邸**（松平直亮）【明治31・9・26、28、10・1、明治32・6・18、19、22、23、24、25、28、29、7・3、5、12、明治31・32年日記覚え書115・下】 **松平直哉**【明治31・32年日記覚え書115・下】 **松平広瀬公**【明治31・9・27】 **松平母里公**【明31・9・26】 **松田楼**【明治31・9・27】 **松原新之助**【明治31・32年日記覚え書115・下】 **松本肉店**【明治32・7・1】 **松本楼**【明治31・10・1】

み **三浦菊右衛門**【明治31・9・12】 **三村友藝**【卅二年頃県外礼状】

む **村岡セイ**【明治31・9・12】

め **茗渓会**【明治31・32年日記覚え書115・下】 **明治義会**【明治32・7・10】 **目次**【明治31・9・18、30、卅二年頃県外礼状、明治32・6・30、7・1、明治31・32年日記覚え書111・下】

も **文部省次官**→柏田盛文

や **安井泉**【明治31・9・28、明治32・6・18、19、22、23、25、28、7・7、10、明治31・32年日記覚え書115・下】 **矢田方**【明治31・9・13、15、16、29、30、明治32・6・17、明治31・32年日記覚え書112・上】 **矢田長之助**【明治31・9・29、10・1、明治卅二年四月調】 **矢田千代子（千代）**【明31・9・15、17、18、23、27、29、10・1、明治32・6・27、7・6、11、明治31・32年日記覚え書111・下】 **柳多元**【卅二年頃県外礼状】 **柳原**【明治32・6・17】 **山口**【明治31・9・28、明治32・6・18、19、23、25、28、7・10、明治31・32年日記覚え書115・下】 **山崎**【明治31・10・4、6】 **山崎光亨**【明治31・32年日記覚え書115・下】 **山田恒**【明治32・7・15】 **山根豊市**【明治31・9・9】 **山本邦之助**【明治31・9・13、23、10・5、明治32・6・18、7・12、明治31・32年日記覚え書108・上】 **山本邦之助夫婦**【明治32・7・2】 **山本庫次郎**【明治31・9・18】 **山本宗連（山本邦之助氏祖父）**【明治31・9・9、12】

ゆ **湯原某**【明治32・6・17】

よ **横澤（文也）**【明治31・9・13、明治31・32年日記覚え書115・上】 **米田穣**【明治31・9・18】

わ **和田玉一**【明治31・32年日記覚え書115・下】 **和田崎**【明治31・10・5】 **和田豊**【卅二年頃県外礼状】 **渡部金一郎**【明治31・32年日

〔付記〕

本稿は、
島根大学法文学部山陰研究センター山陰研究プロジェクト
近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置 ―若槻克堂と剪淞吟社の学際的研究―
（課題番号 一九一三　期間 二〇一九～二〇二一年度　代表 要木純一）
及び、
科研費　基盤研究（C）
近代山陰地域の漢詩と官僚出身政治家の文化教養環境―中国文学と日本史学の学際的研究　研究課題／領域番号19K00296　期間 二〇一九～二〇二一年度　研究代表者　要木純一
による成果の一部である。

Anotation on Diary of Watanabe Kanichirou: 1899 with Index

(Continued from the last number)

OGUNI Yumiko
(Research Project on Works of Watanabe Kanichirou)

〔Abstract〕

Watanabe Kanichirou (1854－1938) was an influential educator in Shimane prefecture and the head of the society in support of Wakatsuki Reijirou (Kokudoukai). Here continued from the last number I made notes on his diary written on 1899. Through this Anotation we can perceive Wtanabe's relationship with important persons of educational society and statesmen and beaurocrats. Also we can understand the situation of the central politics and the local politics in those days. Most of the notes are based on rare historical mateareals which are not easy to search now. Also I appendixed the index of the names and the words on the second diary of Watanabe Kanichirou: 1898-1899.

Keywords：Watanabe Kanichirou, education, Meiji era